

サンジョバンニと

ロマンヴェイル　―余白埋めのために―

高橋明善

夏休みを利用して、社会教育視察団に同行してイタリア、フランス、ルーマニアを二週間の馳け足旅行した。パリでは田原音和会員の元気な姿にお会いし中華料理の御馳走になり市内を案内していただいた。農村はバスの中からみるにとどまったが、いろいろ訪れた中でイタリア、フランスの革新政権下にある二つの小都市の印象記を思い出すままにつづってみたい。

三つの国で何よりも印象的であったのは、これらの国の人々にとって、「解放」という言葉はあっても終戦という言葉はないことだった。ファシズム同調者は、その犠牲者と区別され、前者と残存するファシストに対するきびしい批判を聞きつづけたのだった。

ポローニア郊外の人口二〇三万人のコミュニティン、サンジョバンニは大企業の進出をきびしく規制しているが、工業化の真只中におかれ、現在農民が一八%、労働者が三三%を占める町である。ポローニア市役所壁のレジスタンス戦士の写真は有名だが、ここでも強制収容所に送られた六六人の市民の写真が市庁舎前の広場をささむ教会にかざってあり我々ももくとうをささげた。人民―市民の奉仕によって建てられたこの地域の多数の「人民の家」の中でもとりわけ立派だといわれるこの町の人民の家は地主に抑圧されていた農民の力によるものである。レジスタンスの犠牲者の写真に混って、地

主に虐殺されたかれんな少女の農業労働者の顔もあった。階級対抗の關係は家族主義社会日本よりもずっときびしかったのではないだろうか。西欧個人主義や自由主義はこうしたきびしい緊張關係を背景にもっていることをみななければならないのではないか。工業化の波の中で農業人口は減少し、地主（最大二〇〇ha所有）は企業家化し、小農民は協同組合に組織され、農業労働者は二、〇〇〇人から一五年間に六〇〇〇人に減少し、折半小作は五〇家族に減ったといわれる。しかし人々がカードに興じ飲んでは陽気に語る数多くの人民の家は赤い三州での運動の拠点となっている。

パリについた翌日はストライキの日で、労働者はじめてエッフェル塔前広場に進出した。一四日の革命記念日には労働者街区に押込めるべく核弾頭を装備した軍隊一万人が待機中と翌日の新聞は報道していた。このすさまじい国家権力の発動は国境を接し、その変更を繰返し、貧富の差の大きい西洋における国家権力の威力を象徴するようにも思えた。同時にパリ・コンミュンについてマルクスがパリを追われた労働者のパリへの復帰であったと述べている言葉が思いうかべられた。その労働者が住む「赤い郊外地帯」の一角にあり、労働者が七五%を占める人口二・五万人のコンミュン、ロマンヴィルを訪れた。庁舎正面玄関には革命記念日を祝して高々と「自由（リベルテ）」のスローガンがかかげられていた。そういえばパリのあちこちでもこの文句をみかけたのだった。この町もレジスタンスの歴史をもち、今日では統一行動綱領に基いて市政は運営されている。制度的には日本に比しはるかにきびしい中央集権制の

下で、市が住民に対して次のようによびかけた革命記念日のための巨大なポスターを我々にくれた。「団結しよう。抑圧と闘おう。政府の専横と闘おう。財政的封建性と闘おう。自由の強化と拡大のために闘おう。」日本でこのような訴えをする自治体があるだろうか。大きな都市と同じくこの町にも一戸建の住宅や店舗を見ない。この共同空間としての都市をみると「都市と農村の対立」という言葉が現実性を帯びてくる。自然を排除したこの共同空間は広場を不可欠のものとするが、その広場もローマ、ポローニアでは自動車が入を排除しつつある。また、日本とは比較にならないまでも、古代、中世の伝統を引いた都市とその生活様式にもやはり資本主義の都市としてのスプロールの拡大の影響をみる事ができる。

労働者の町ロマンヴィルでは、パリではバカンスのためみかけることの少かった沢山の子供達が我々を取巻いて交流を求めてきた。それにしてもラテン系の人々は人なごく、あちこちの自治体や労働組合で歓迎され、酒好きの私には楽しい旅であった。